

**第476回 2月25日開催
出席委員（50音順・敬称略）**

荒巻 裕	大村 英昭
木下 明美	黒田 勇
深井 麗雄	森 輝彦

テレビ番組

「たかじん ONE MAN」

03年2月5日（水）午後11時55分～0時55分 放送分

*** 深井委員**

涙の見せ方をもう少し工夫できなかったかと思う。最近のテレビの番組欄を見ると、「号泣」「絶叫」「マジ切れ」がサブタイトルの三羽がらすになっていて、人間の感情を公共の電波で直接ぶつける傾向が強い。このままエスカレートして行くと、バブル経済がはじけるように視聴者も離れて行きはしないか。その時一番困るのは放送局であり視聴者だと思うので、涙の見せ方をもっと研究してほしかった。

*** 木下委員**

食べ物と自分史というのは密着しているので、その着眼点は良かったと思う。ただ、たかじんさんは今の時代のテレビに、何が受けるのか受けないのか非常に熱心に研究しているということなので、今回ある意味で番組が作られた舞台裏を垣間見た感じで、たかじんさんが流した涙をどう評価していいのか正直言って分からない。でも私自身、もらい泣きしたのは事実ではあるが。

*** 黒田委員**

自分自身と重なって懐かしく思いながら見た部分もあった。だからこそ、個人の苦勞話や思い出をもう一歩進めて、私たちの世代共通の記憶として持てるような番組作りをしてほしかった。時代を共有できる番組作りの方向ではなく、単なるたかじんさんら出演者個人の涙物語りに行ってしまったのは残念だ。同じ世代だけでなく、違う世代にも共感の輪が広がるような番組作りこそ大切ではないだろうか。

*** 荒巻委員**

新聞記者時代に先輩から「現場を見て流す涙があるのだったら、記事の中に凝縮しろ」とよく言われた。番組の作り手が視聴者やリスナーに本当の意味の感動を伝えたいのなら、相当抑制する気持が必要だ。本来涙を流すのは出演者ではなく、視聴者

やりスナーの方だからである。プロだったら悲しい気持ちをぐっところえ、その姿を見た人たちが自然にホロリとくるというのが、本当の意味の良い番組ではないか。

***大村副委員長**

思わずもらい泣きをしてしまったほど共感できる番組だった。確かに別の世代の人でも共感できるような普遍的な作り方も必要だとは思うが、私の世代で言えば非常にリアリティーがあって画面に引き込まれた。プロは泣いてはいけないという意見もあるが、僧侶の身の私も読経の最中に感極まって絶句したりすることもあり、自分で言うのもなんだが、生身の人間らしくてそれはそれでよいのではないか。

***森委員長**

私にとって、辛さや苦しみと食べ物の結びつきの記憶は非常に鮮明で、見ていて内なるものがぐっと込み上げてきた。ただ私は「男は簡単に泣くな」という教育を受けてきた世代なので、出演者がテレビという公共の場で簡単に涙を流すということには多少抵抗感があった。確かに今は自分の感情をストレートに出す時代で、それがテレビにも反映されているが、安易な手法としてあまり「涙」は使ってほしくないと思う。

「放送倫理・番組向上機構」の設置について

民放連などが、放送倫理の更なる向上や視聴者との一層の信頼関係の構築を図るため、現在ある第三者機関を統合し、7月1日から「放送倫理・番組向上機構」を発足させることについて広報室長が報告した。